



名古屋大学からNagoya Universityへ

名古屋大学での大学運営・改革状況 と研究力向上への取り組み

名古屋大学

平成27年2月20日

本日の内容

- イノベーションの創出
- 研究力強化

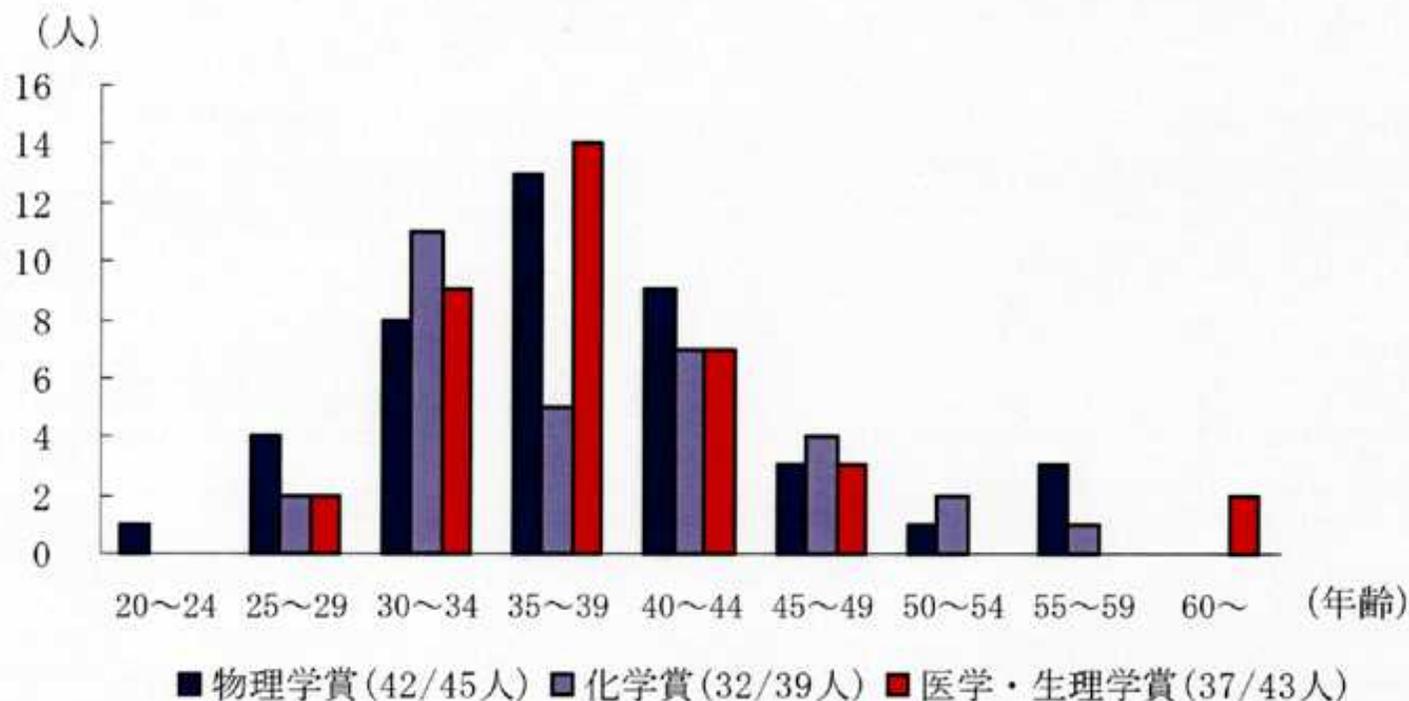


- ✓ 若手の育成
- ✓ 多様性の確保
- ✓ 基盤的研究と戦略的研究
の双方の支援

- 問題提起

ノーベル賞の適齢期

第1-2-19図 ノーベル賞受賞者の業績を上げた年齢の分布(1981~2000)



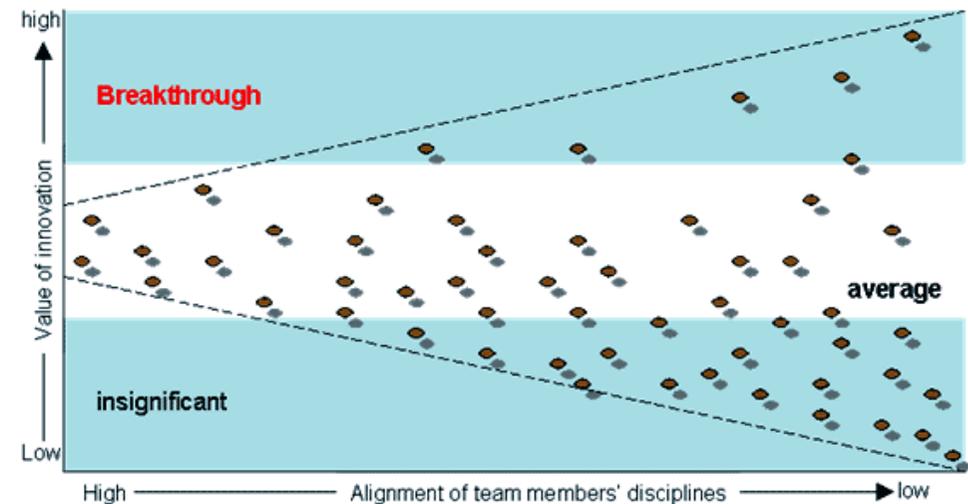
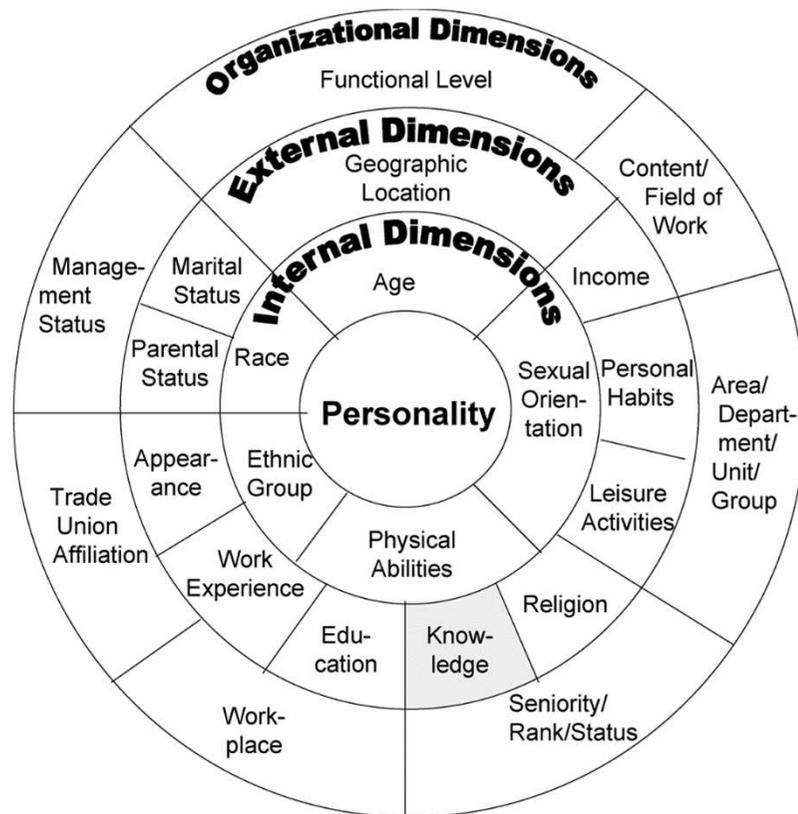
注) 業績を上げた年齢は、受賞のきっかけとなった論文等の発表時点である。その際に以下の手法を適用した。

- ①受賞のきっかけとなった論文等の発表年から生まれた年を単純に差し引く。
- ②複数の論文等が受賞の対象になっている場合は、最初の論文等が発表された年を使用。
- ③受賞の対象となった論文等の発表時点が特定できない場合は、その中間の年を発表時点と仮定。例えば、1950年代の業績であれば、1955年。1950年初めの業績は、1952年。1950年後半の業績は、1958年。1950年中頃の業績は1955年。

資料：文部科学省調べ

“多様性”と“創造性”

アイデアを生み出すための思考～構成員の**多様性**が大事

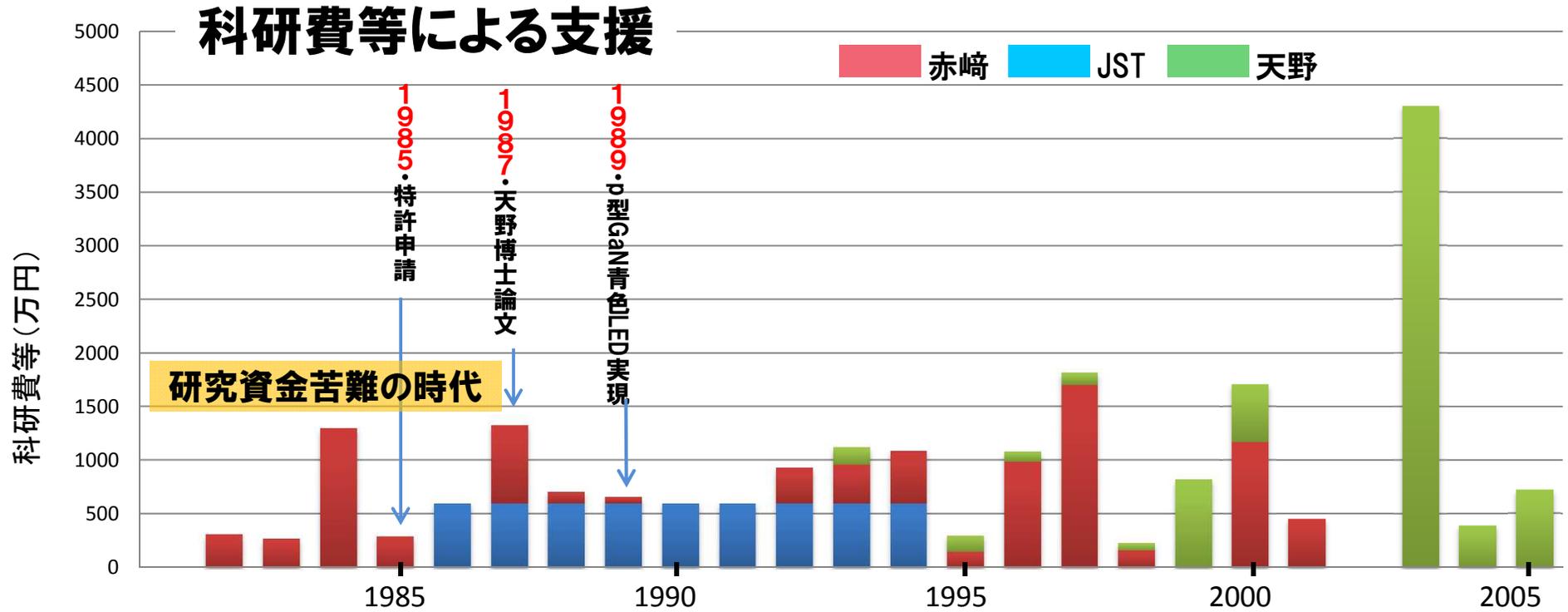


Source: In accordance with Gardenswartz and Rowe (1994, p. 33)

Figure 1. Impact of team members' diverse disciplines on innovation

Ticoll, David. "Get self-organised". Harvard Business Review 82, no. 9 (September 2004): 18-19

青色LED開発とデュアルサポート



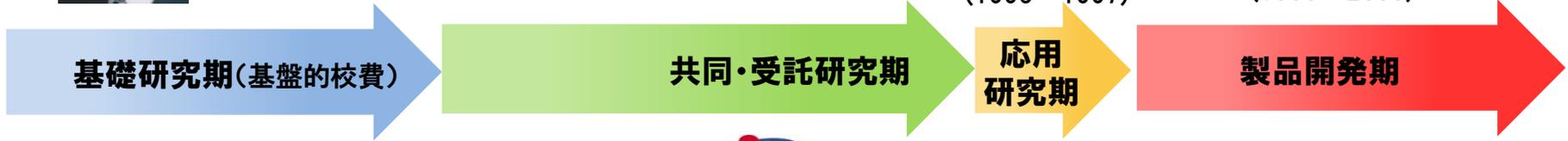
19年間の
基礎研究
(1967~1985)



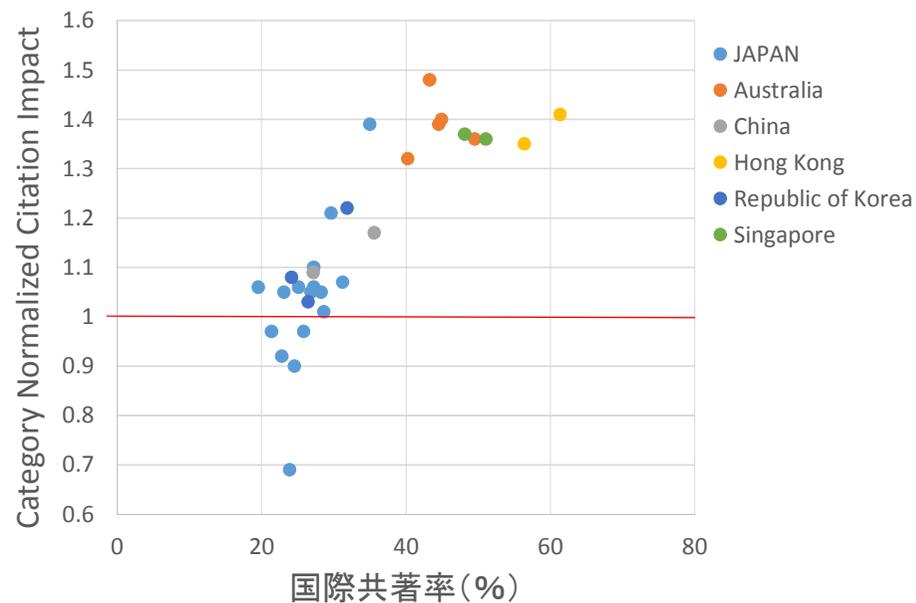
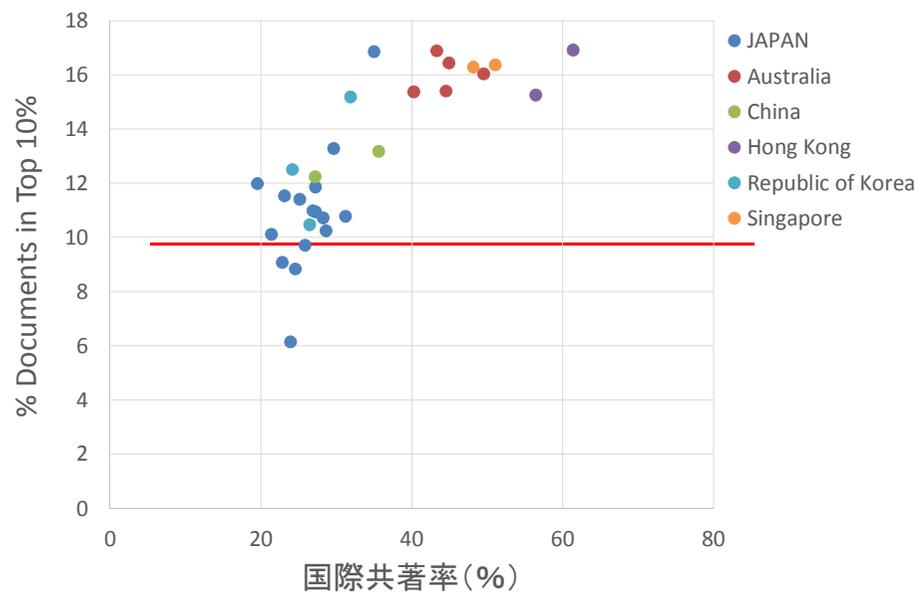
産学連携による
9年間の研究開発
(1986~1994)

応用研究による
実用と製品化の
ための3年間の研究
(1995~1997)

製品開発と
周辺技術のための
8年間の研究
(1998~2005)

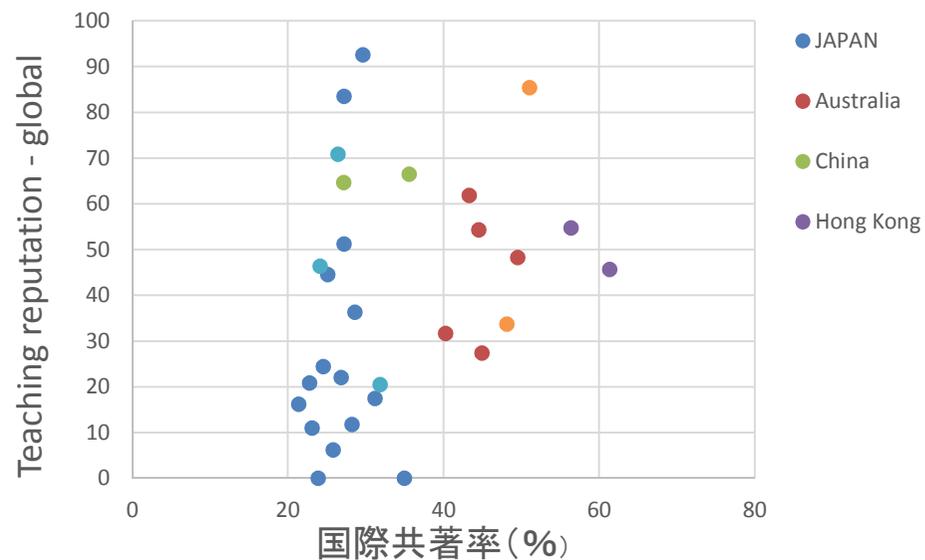
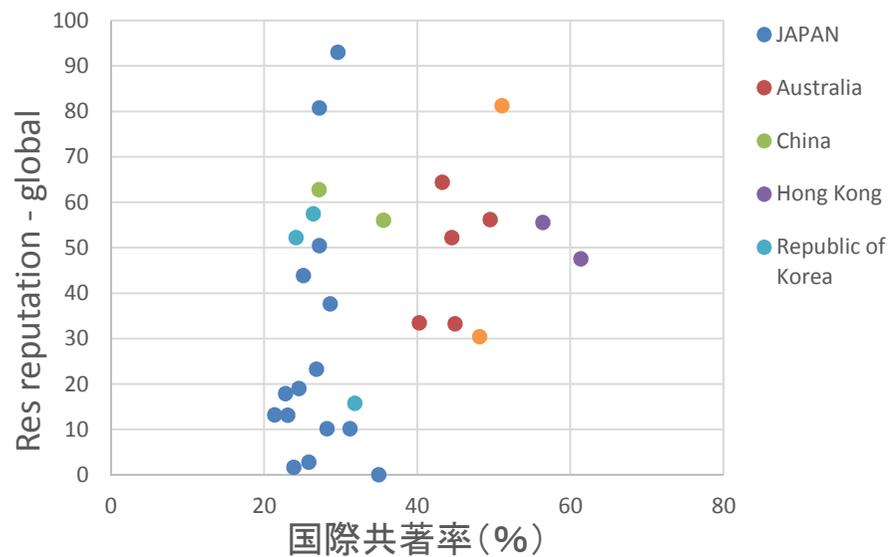


国際共著率と研究力評価項目



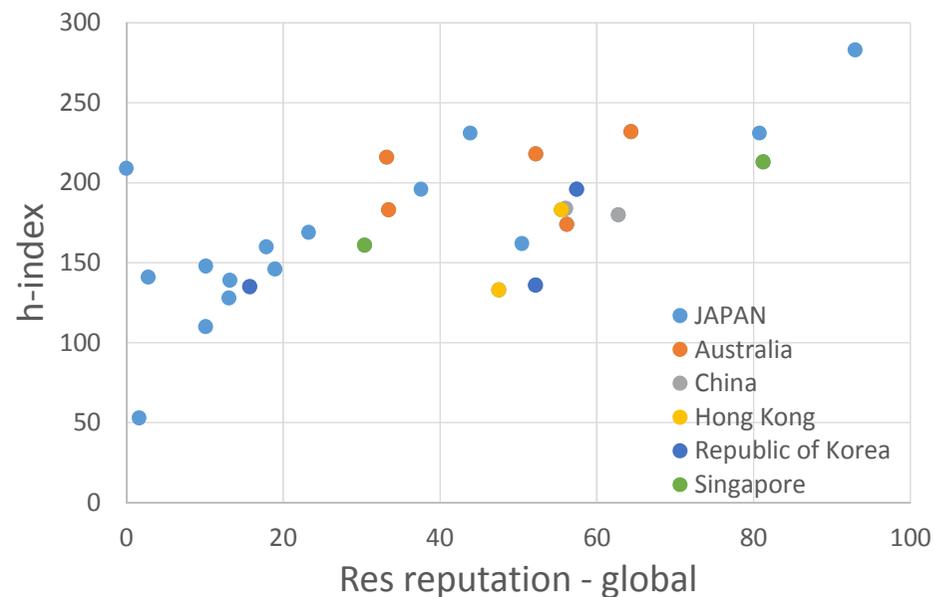
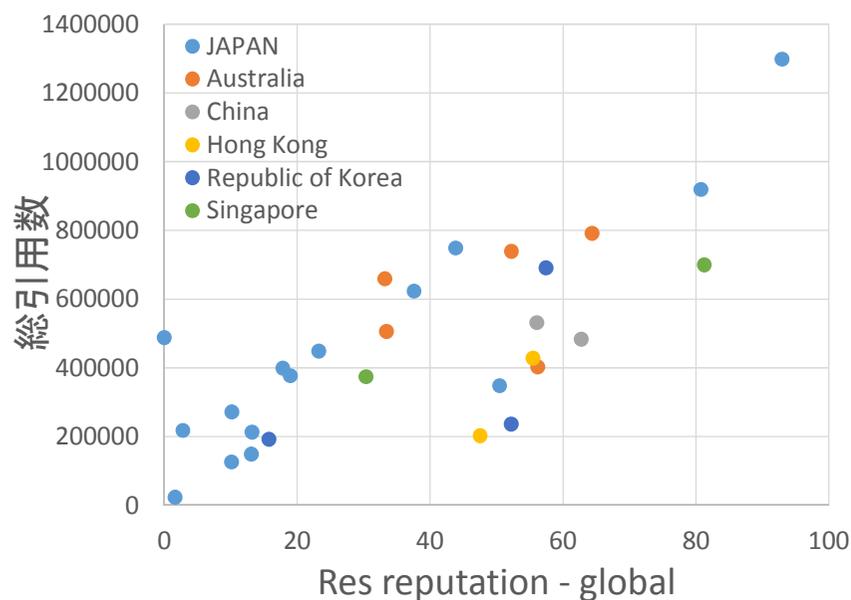
国際共著率と研究力評価項目とは強い相関

国際共著率とReputation



国際共著率とReputationには大きな相関はない

Reputationの支配要因



Reputationは、大学の総合力(歴史・伝統、知名度など)が影響

名古屋大学の強化方針

- 強みの強化による世界的研究拠点形成
 - 最先端国際研究ユニットの設置
 - 課題: **大型研究費**の獲得
研究専念時間の確保
- 若手による挑戦的異分野融合研究支援
 - 若手新分野創成研究ユニットの設置
 - Young Leaders Cultivation制度(若手、外国人、女性研究者の独立性確保)
 - 課題: **基盤的経費**の措置
安定なポジションの提供
- 大学全体の競争力強化
 - 部局への間接経費配分方法の見直し
 - Joint Degreeなどによる海外有力大学との連携

デュアルサポートの必要性

- 間接経費の必要性

- 競争的資金のみならず競争的経費にも間接経費(3割)の付与。

- 間接経費を大学の裁量で使える経費へ。

- 組織としての競争的環境の導入

- 優秀な人材の確保

- 若手の支援/研究の加速化支援

- 基盤的経費の必要性

- 教育環境確保(電子ジャーナル経費を含む)

- 任期のない人件費(優秀な研究者、マネジメント・知財・国際・広報・法務人材等)

- 変革に向けた資金(国際的な協力、再編など)